

一月作品

月集スバル

☆一月特別作品☆

セレモニー 桑原正紀 東京

秋雨に濡れたる落ち葉ふみゆけば乾ける国の戦禍とほしも
もう土を踏むことのなき妻の骨さやさやと鳴る骨壺のなか
納骨といふセレモニーを見おろして中国山地の雨後の空あをし
長兄の七回忌と妻の納骨のすすみゆく鄙の秋の墓原
墓碑銘に生国武蔵と刻まれて妻は眠れり備後の国に

新宿駅 小島ゆかり 東京

ペットボトルの水を飲みをり自販機のやうに入り組む新宿駅で
おそく来た秋は夜風の皺ふかく前期高齢期の素肌吹かるる
ここ通るたびに体がしとしとす土湿る境内の抜け道
無人兵器ゆゑに微塵も躊躇なく殺戮すべし西で東で
岩手よりメールありもうストーブを出しました 濃い金の朝かけ

カバン 風間博夫 千葉

残業をカバンに詰めて持ち帰ることはせざりきよき思ひ出ぞ
手提げカバン、肩掛けカバンとして使ふ別売の長さベルトを付けて
ご存じか混成語たとへば「smoke」や「fog」や「smog」^{スモッグ}「天気汚染の
追ひつくまで追ひかけてきてあきらめてくれない死とは 南無阿弥陀仏
球体で浮力ありたるイメージのたましひ、きつと個性もあらん
一を聞いて 水 上 比呂美 東京

一歳は神学者めく顔をしてスマホに人差し指をすべらす
一を聞いて一を知りたる一歳は「うさぎ」を知りて手をびよこびよこす
その人は世界線といふ涯^{はたて}まで行きて戻りて美季に会ひたる
ごくまれに男気^{をとこまへ}のある顔をする娘の坊や眉うすけれど
「うちの子はダダと呼びます、ダディーのダダ」美容師が言ふスマホ見せつつ

☆ ☆

水島晴子 兵庫

ぶざまにもまた転びたり夜の更けのごみ置き場なる扉に押され
ふるさとも父母も失せしよりハビリでうたふ旅愁の歌詞だいきらひ
さびしくて惚けたといへり九年の車椅子介護を解かれたるひと
あの(正田美智子嬢)が転倒骨折 時間まさしく流れ去りつつ
あたらしき小箒ひとつ木の下に置かるる見れば心のごとし

高野公彦 千葉

ぜんまいを日々巻けど日々遅れゆくこの古時計われかと思ふ
あの世へと道触の神が送る風 老いの追風 いたくな吹きそ
天数ふ多くなりたる家飲みはコロナ禍のせもまた老いのせも
色即是空、伊予弁に換へ味はへり「この世はつまり何ちゃ無いんよ」
昨今の短歌を見れば十団子の小粒になりて面白きも在り

奥村晃 作* 東京

松月院大堂無住の境内に巨樹並び立つ数百年を
カヤ、イチヨウ、ケヤキ、クロマツ古木にて「保存樹木」の札下けて立つ
モミ、ジせるその葉を全て落としてたり銀杏が然り櫛も然り
秋に葉を染めて落とせる樹々たちと年中緑き葉を持つ樹々と
いちいちに考え方が違うんだから一緒に暮らすはキセキ

森重香代子 山口

常軌を逸すといふ詞あり平凡に生ききて不意に今日思ひたり
自転車にも乗れないままに九十を迎ふる身かと憐れまれたり
この家の不運を知りて訪なはぬ山禽ならむ啼く声聞かず
素麺はさびし なにかもつとこつてりした昼餉とらむと思ふ
しみじみと語り合ふとふこともなく独りの暮し久しくなりぬ

影山一男 千葉

ワクチンを打ちてけだるき秋の夕櫂のひと木さわだちやまず
五十年会はざるままに計報来ぬ短歌研究会二学年下ぞ
国学院短歌研究会の日々慕ひくれにし若き顔思ふ
歌を詠むことありにしや市役所に勤むと聞きて学卒へしのち
君住みしよさこい高知を訪ふこともなくて残世を涉りかゆかむ

狩野一男 東京

クモ膜下出血以降十七年過ぎた今年も秋となりたり
十月が生まれ月なる細君の冬来る前の決断、手術
冬が来る前にやらねばならぬこと我にもあつて 阿部慎之助
一灯下妻無言又我無言 家も子も無く生深みかも
くらがりに二人消えゆきつづくのかいつをはるのか今年の秋よ

宮里信輝 神奈川

宮ヶ瀬ダム天端を徒歩で往復す2343歩
「宮ヶ瀬ダム」バス7台で園児来てダムジャックなり人気のやうです
宮ヶ瀬ダム展望塔の望遠鏡にて望めますダム以外の景
宮ヶ瀬湖遊覧船も出て居りてダムサイトコース大人一〇〇〇円
約20000000リユーベと言へり現在の宮ヶ瀬ダムのその貯水量

木畑紀子 京都

とろとろと下り坂尺き稔り田に出るさんぽみち戻らずゆかむ
曼珠沙華咲きこほろぎの鳴いてゐるいつかきた道、否けふの道
行きて帰るさかみち野道ゆらゆらと足もつれつつあともうすこし
来たみちを戻ることなく幾曲がりして帰りつく大汗をかき
一生とは楢円道程行きて帰るまでのろのろと遠まはりして

鳥田 暉 神奈川

今日までのあやふやなりし半生をきらりとかくす向日葵の花
蟬たちの声をかさねてうるさしよなげき叫べる熱き地球を
さつぱりと雲はらはれし秋の日を罪もつ心洗ひさらさむ
老人になりても夢の果たされず遠き砂漠をさ迷ふラクダ
おとろへし脚の力をはげまして夜の銀河を馳けまはりたし

大松 達 知* 東京

かつてありし遵法闘争のごとくにも自習させおり喉痛のどいたの日は
いっぼんのクヌギすべてを大鋸屑にする椎茸を育てるために
さみしきや妻が黄色のカッターと呼んでいる黄緑色のカッター
その門は閉まっていますがこちらからなら出られます何かの比喩か
言葉より涙は残酷ではないと、小川洋子を読んで灰色

田宮 朋子 新潟

銃弾のごとくにゲリラ豪雨ふり稔り田の稲倒れてあはれ
秋陽さす庭石のうへ青銀のひかりさばしる虹色蜥蜴
夜の窓に映るわが顔ごとなく水族館の魚に似たり
秋霖のけぶるゆふべの海原は太古のごとくとりと濁る
音楽のやうに蜻蛉せがれいとびかひぬ魚沼盆地の刈田の上を

津金 規雄 神奈川

愛と死とそして忘却 ロマネスクに青春を語る短編「廢市」
人生の暑中休暇か青春は 掘割をゆく舟足し
大林宣彦が撮りし映像にあまたうつれり柳河のみづ
福永を読めと勧めし高校の友人彼のそののちを知らず
いくたびか読み返しきて今宵また旧友に逢ふ思ひに追ふ文字

小山 富紀子 京都

越えられぬ試練を神は与へぬと笑みつつ逝きし人の恋こひしも
珈琲を飲みつつぼつと街を見るスマホ嫌ひのわれの樂しみ
今日行くは日なたか日かげかさて行かむまだまだ暑き十月なかば
この人はきつとどこかで会ひし人記憶ばらばらめくれ秋風
さまざまの時を示して止めてある時計を飾る老いしマスター

清水 正子 神奈川

白秋が食傷したるアオウミガメわれは子亀の放流に会ふ
白秋の跡をたづねし父島の海はもきらら鯨のメツカ
繁殖期なれば海面を尾でたたき反り身でジャンプする鯨たち
白秋に長崎くんち奉納の詩がありて樂し「鯨の潮ふき」
若き日に鯨のステッキ作りしよ「暮しの手帖」で調理法みて

小嶋 一郎 佐賀

このわれを敵と称せし彼のことときに憶ひて励みともせり
斯く狭くなりたるわれの生きの世を眠らず憶まもふ眼を閉ぢて
背囊を背負ふごとしとわが猫背譬へてくれし友も世を去る
この十日雨降らぬこと詫びながら鉢の桔梗に今朝は水遣る
願ひごと叶ふ事なし米寿過ぎあとは卒寿を待つこのみの身に

福士 りか 青森

メダルよりアイデンティティ一特技に挑みつづける堀米雄斗
さあこれがラストトリック堀米のボードがほそきレールをつかむ
着地するその瞬間にTシャツのひらめきて見ゆ脇腹のあざ
十代のスケボー選手に放たれし「真夏の冒険」つて何だろ
俳句ならつきすぎの感こころへメダルに恋した「吉沢恋選手とか

藤野 早苗 福岡

マルシアカガルシアだつたかガルケスカいマルケスカ 脳なうきこんとん
週末で六百ページ読み了ふと決めればシニアグラスがわらふ
「百年の孤独」を読みたいわたくしと呑みたい夫が暮らすうつしよ
傷つける笑ひは昭和の負の遺産ともに笑はん令和のいまを
家猫の寿命とどん延びる世ににんげんいつまで生きねばならぬ

田中 愛子 埼玉

わが作と気づき批評を加へたる歌仲間あてつつしみ聞けり
ヘッドスパ受けつつしばし瞑想す題詠「長雨」おのれに課して
なるやうになる、なるやうにしかならない 晩年の母つねね言ひき
「おかあさん」つぶやきさうになる時を「おかげさま」とか言ひ換へてみる
秋の日を緩くステップ踏みてをり祖母といふ意のベスデモルス・ヴァルス

小島ゆかり著書二冊

はるかなる虹

第十六歌集
コスモス叢書第1236篇

短歌研究社

令和6年7月刊 三〇〇〇円(税別)

送料三〇〇円

サイレントニヤー

猫たちの歌物語
コスモス叢書第1241篇

短歌研究社

令和6年8月刊 一八〇〇円(税別)

送料三〇〇円

連絡先 〒112-0013 東京都文京区音羽一―一七―一四

音羽YKビル 短歌研究社

奥村晃作歌集 令和5年12月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

蜘蛛の歌 コスモス叢書第1232篇 六花書林

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七―一五―一六

大松達知歌集 令和6年1月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

ばんじろう コスモス叢書第1233篇 六花書林

連絡先 〒170-0005 東京都豊島区南大塚三―二四―一〇

マリノホームズ1A 六花書林

高野公彦評論集 令和6年3月刊 二八〇〇円(税別) 送料三〇〇円

歌の魅力の源泉を汲む コスモス叢書第1235篇 柘書房

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼一―二―一五〇六

斉藤梢歌集 令和6年7月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

青葉の闇へ コスモス叢書第1237篇 柘書房

著者住所 〒982-0831 宮城県仙台市太白区八木山香澄町

二―一〇―一三〇六 薄葉様方

橘 芳 園 新 潟

帰洛して主上臣下の罪問ひし親鸞の言葉今に遺れり
冤罪を被りし師は一生かけ「教行信証」書き生証したり
意を汲みて歎異抄後序に親鸞の「流罪の記録」を添へし唯円
帰洛後に親鸞おしと札立てる脇のスーパーでサンドイッチ買ふ
ここにして「教行信証」後序なるや五条西洞院通りの狭し

鈴木 竹 志 愛知

ゆるキヤラに会ふたび内にゐる人の汗のことなど慮れり
猛暑日の炎天に立つゆるキヤラの内なる人の汗の量はも
ゆるキヤラの内にある人いかにして熱中症対策なしゐるや
出番待つゆるキヤラの人水を飲み塩飴何個か隠しに入れて
ゆるキヤラの内なる人のかかへゐる孤独の量はいかほどならむ

原 賀 環 子 東京

次つぎとエアコン壊す炎熱の都市に修理の予約バンクす
六日間冷房なしでくらすとき目鼻も首も背も^{せな}溶けさう
人形の胸にはほこりが落ちてをりエアコン修理のすみし夕ぐれ
人形の胸のほこりを抓みけり今生われは女孫を持たず
星戻の夜となりたり冷房のとどく厨でレンジをみがく

水 上 芙 季 神奈川

雨を見るのではなく傘さしてゐる人を見つけて天気と言ひぬ
柔らかなふくらはぎ持つ夫には「足がつつた！」は針小棒大
生れしときよりも三倍大きな子ごとんとんごとん寝返りする
雄に生れしばかりに生後一日で殺生されるひよこ 曇天
「精神疾患による労災認定過去最多」のニュース、すぐにCM

大 野 英 子 福岡

曇天の空にラジコン飛ばしゐる人の帽子の赤は動かず
朝風にほつりと花を落としゆきへクソカズラの花どき終はる
静かすぎる海をときをり騒がせる鯉、わたくしを打つごと跳ねる
陽の差さぬ芝草、陽の差す芝草のあれば思へりさみしきこの世
選挙掲示板は要るのだらうかルッキズムの一つになつてないのだらうか

松 尾 祥 子 東京

十月の雨に濡れるる公園のベンチに一羽雀がとまる
鷹狩の家光が茶を飲みしとぞ語りつつゆく井の頭公園
弁財天に縋ると言ふにあらねども手を合はせたり時雨降る朝
公園の奥に置かるる西望の平和記念像の原型仰ぐ
長崎の平和の像を見たるのち猿山の猿の蚤取りを見つ

鈴木 千 登 世 山口

研ぎたての柳刃すつと抜きながら切るしめ鯖の青銀の皮
裏庭の柚子の実酢の実香りの実牙なす棘が肌を刺し貫く
鋭き棘の隙に玉なす箱入りの青柚少女を手籠に迎ふ
酢醬油を（すいち）と呼びし垂乳男の父の子なれば刺身は（すいち）
青柚子のしづく一滴 黄金の香氣に夫の食欲還る

小 島 な お* 東京

無花果が熟れてゆく雲の低気圧 順番が来て話しはじめ
羊肉噛むと血の味ひろがれる蔵王樹林に菌が点りゆく
尾へ顔を沈めて眠るきつねには風が重たい婚姻の旅
脱衣場に指輪を外し置くときの、やがて白髪になる睫毛見る
三年目のクリスマスには火口湖を覗く重たい眼がほしい

小田部 雅子 静岡

斎藤 梢 宮城

発酵はゆかいな時間 膨れつつまた膨れつつ丸パンを生む
発酵はふしぎな時間 野菜屑ふくふくにほふ土に還れり
発酵はあやしき時間 あれよあれよあくま現れ腐敗に走る
発酵と腐敗との差のきはどさは「ヒトに良いか」の一点に尽く
腐敗臭ふんぷんたるかの永田町に撒くべき発酵菌はあらずや

会はぬうち母は子どものやうになり葡萄ゼリーをおとなしく食べる
窓向かうに小さな天文台のあり 秋の星座を感じてみたし
金木犀がなみだながしてこの路地に風の香りの行きわたりゆく
うつすらと中空に浮く半月はわれの溜息 ことば羽織れず
羊羹の大きな大きな栗食べてはがらかになる思ひがけなく

うたを味わう―食べ物の歌 ●高野公彦

一月の味 ―お粥のうまさ―

芹の粥ぎんなんの粥みなよろし さら
さらと薄雪の正月 斎藤 史しゅう

日本料理でも中華料理でも、味の濃いものを食べたあとは、あつさりしたものが欲しくなる。お茶漬けでもいいが、粥に梅干か味噌を落として食べるのは極上の味である。

右の歌に詠まれているのは、正月料理に飽きたあとの粥であろう。さらさらと降る薄雪を眺めながら、芹入りの粥、ぎんなん入りの粥を食べる。いかにも美味しそうな

感じた。作者は長野に住んでいるから、芹もぎんなんも近所でとれたものかもしれない。歌集『秋天瑠璃』の一首。

昔、私の育った四国の田舎では、朝食によく芋粥が出た。薩摩芋をサイの目に切つて粥に煮込んだものである。寒い冬の朝、ふうふう言いながら食べた。物が豊富でなかった時代の食べ物だが、今でも時々あの熱い芋粥を食べたくなる。

ある夏、中国を団体で旅行したとき、暑さと中華料理の濃厚さにダウンしたことがある。仲間と別れ、私はひとりホテルに戻って休息した。そして粥を作ってもらった。

鶏がらスープで煮た粥であったから、ちよつと油っぽかったが、それでもうまかった。何かほつとするような味だった。それより以前、たまたま私はこんな歌を作ったことがある。

心疲れたる人に、あるいは自らに。
ねむれ千年、ねむりさめたら 一碗の粥
たべてまたねむれ千年

粥はいわゆるグルメとは反対の食べ物である。でも《人の体と心に優しい食べ物》としてはこれ以上のものはない、と言ってもいいだろう。